

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 20日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22710257

研究課題名（和文） 「本土防衛・本土決戦」をめぐる戦跡の研究—沖縄、濟州島、松代を横断する戦争の記憶

研究課題名（英文） A Study on the War Related Sites connected with “Japanese Homeland Defense” in Okinawa, Jeju and Matsushiro

研究代表者

北村 毅（KITAMURA TSUYOSHI）

早稲田大学・アジア研究機構・研究員

研究者番号：00454116

研究成果の概要（和文）：沖縄、濟州島、松代の三つの地域の「戦跡」（戦争遺跡）をフィールドとした調査研究を通して、東アジア地域における戦争、植民地、占領、戦後処理、反共などの記憶の相関性・連続性の検証を試みた。その研究成果は、数多くの論文や学会発表として公表したが、さらにその成果をアカデミズム内に留めることなく、シンポジウム、市民講座、新聞や商業誌への寄稿などを通して広く世に問うことができたことの意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：In this research I examined interconnectedness of and continuity between memories of war, colonization, occupations, the postwar process and anticommunism in East Asia through fieldwork on war related sites connected with “Japanese Homeland Defense” at the last stage of the Pacific War in Okinawa, Jeju (Korea) and Matsushiro (Nagano prefecture). I brought out the results of this research as academic papers and conference presentations. It is socially significant that I could share the results of this study with society through symposiums, lectures for the general public, and contributions to newspapers and magazines beyond the academy.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：戦争の記憶、戦跡、本土決戦、本土防衛、松代、沖縄、濟州島

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで、「戦跡」（戦争関連の構造物・遺構・跡地）と呼ばれる場所をフィールドとして、「戦争の記憶の表象」や「戦死者の慰霊・顕彰」をテーマに調査研究を進めてきた。

近年、「戦争遺跡」「戦争遺産」「負の遺産」などさまざまな言葉で呼ばれ、「文化遺産」

として扱われることの多い戦跡であるが、軍事史的な関心や平和教育の教材としての扱いが中心である。近年、教育学や歴史学や考古学といった分野を主として、戦跡を対象とした研究が発表されているが、その大方は戦跡の「保存・活用」を動機とした実態調査的なものである。

こうした戦争の事跡の物質的展開または

残存としてのみ戦跡を捉える静態的な研究が大勢を占める中で、研究代表者は、戦争が終わった後でそこで何が行われてきた（いる）のか、すなわち戦跡という場の事後性や現場性に注目してきた。

具体的には、沖縄の戦跡を事例として、戦争の語りの実践、慰霊祭、戦死者供養、戦跡巡礼、戦跡観光、戦跡研修、記念碑の建立、遺骨収集など、さまざまな実践のフィールドワークを行い、さらには文献史資料からそれらの歴史の変遷過程を再構成し、単著『死者たちの戦後誌』（御茶の水書房、2009年）をはじめとした一連の研究成果に表してきた。

平成19・20年の科研費採択課題「旅順と沖縄の戦跡を巡る近代日本の国民国家化に関する研究」では、沖縄を基点として旅順へとフィールド展開を試みた。同課題の目的は、「勝った戦争」である日露戦争と「負けた戦争」である沖縄戦の記憶を相関的かつ動的に検証することによって、近代日本の国民国家化のプロセスを検討することにあつた。そのため、両戦争の象徴的な記憶の場である旅順と沖縄の戦跡に関する膨大な言説を分析対象とし、戦跡における諸実践の連なるの果てに近代日本の国民国家化がいかにも実現されていったのか、慰霊・顕彰、教育、観光、メディア、コロニアリズム、ナショナリズムを巡る言説の絡み合いを紐解く中で明らかにした。

## 2. 研究の目的

本研究課題では、研究史的には無縁であつた沖縄、濟州島（大韓民国濟州特別自治道）、松代（長野県）を接続する「本土防衛・本土決戦」という視点を導入する。その上で、これまで別々に論じられてきた三つの地域の戦争をめぐる記憶を「本土防衛・本土決戦」というコンテクストの中で捉え直し、死者や暴力の記憶がどのように想起・忘却され、人びとの間で語られ、記念碑や儀礼を通して表象され、地域の中で（非）共有化されてきたのかを検証する。

上記の三つの地域に残る戦跡群は、「日本本土」への米軍上陸が予想されたアジア太平洋戦争末期に、「本土防衛・本土決戦」に備えるための軍事的拠点として形成された点で共通項を持つ。沖縄以外においては、米軍上陸（地上戦）は現実化しなかったとはいえ、いずれにおいても地域住民や旧植民地出身者が徴用・動員されて大規模な地下壕や軍事施設が建設された。戦後それらは、単に廃墟や遺構として埋没したわけではなく、米軍の軍事施設として転用されたり、新たな暴力や虐殺の現場となったり、戦争や占領の記憶を語る場として活用されたりしてきた。

沖縄と濟州島の共通点は多々あるが、大日本帝国の周縁島嶼地域という文脈の中で「本

土防衛」の最前線に位置づけられたことが重要である。同島は、沖縄戦の後、米軍の上陸が予想された地点のひとつであり、島中に地下壕（陣地）が張り巡らされた。同じ頃、「本土決戦」が現実化しようとする中、中央の統治機構の機能を確保するために、長野県長野市松代町の堅牢な地盤に築造されたのが松代大本営である。

本研究課題では、三つの地域の戦跡で行われている個々の実践を調査し、史資料からそれらの実践の歴史の変遷過程を再構成することで、アジア太平洋戦争を基点とする記憶のトランスローカルかつトランスナショナルな特質を明らかにする。その過程で扱われる戦跡をめぐる記憶は、「戦争」に限らず、「植民地」「占領」「強制連行」「虐殺」「戦後処理」「反共」など多岐にわたるが、これまで別個に論じられてきたそれら東アジア地域の記憶の相関性・連続性を明らかにすることが、本研究課題の最終的な目的といえる。

## 3. 研究の方法

本研究課題では、フィールド調査を踏まえた文化人類学的アプローチと、公文書や統計といった史資料を通時的に検証する歴史学的アプローチを併用しつつ、戦跡という場と戦後そこで行われてきた諸実践の共時的かつ通時的な調査研究を実施した。

具体的には、①沖縄、濟州島、松代に分布する戦跡群・記念碑・記念館（平和博物館等）の調査、②そこで行われる戦争の語り、追悼行事、遺骨収集（遺骨発掘運動）などの実践の参与観察、③市民団体、行政、当事者団体（遺族会）、4・3研究所などの戦跡をめぐる運動展開についての調査、④当事者（体験者、関係者）や地域住民への聞き取り調査、⑤公文書、軍事記録、報道記録、内部資料などの資料の収集と分析が挙げられる。

なお、濟州島調査では、濟州4・3研究所に所属する高誠晩特別研究員、濟州4・3研究所、濟州大学の趙誠倫教授の協力のもとに現地調査を実施した。ここに記して感謝の意を表したい。

## 4. 研究成果

本研究の成果は多岐にわたるが、以下、主に三つの側面から概要を示す。

### (1) 戦跡や虐殺地における遺骨発掘

本研究では、沖縄における遺骨収集と濟州島における遺骸発掘の比較研究を行った。

沖縄では、現地のNPO団体により西原町幸地の丘陵地などで行われている遺骨収集の調査を実施した。遺骨収集の参与観察、ならびに、遺骨収集関係者、行政担当者、戦死者遺族に対する聞き取り調査を通して、沖縄における戦後処理の新展開について何編かの

論文にまとめ、公表することができた。さらに、その研究成果をアカデミズム内に留めることなく、シンポジウム『骨』をめぐる思考(2010年8月15日、於・佐喜眞美術館)、市民講座、中学校での講演、地元紙や商業誌に寄稿した論考を通して広く世に問うことができたことの意義は大きいといえる。

濟州島では、1990年代以降、タランシー窟、別刀峯(ピョルドボン)日本軍坑道陣地、濟州国際空港などの「4・3遺跡地」で遺骸発掘が行われたが、その現場となった場所の現状(碑石、説明板など)を踏査した。2010年以降、濟州島で遺骸発掘作業は行われていないが、その事後的な展開として、タランシー窟の虐殺現場から遺骸が発掘された様子を再現したジオラマが展示されている濟州4・3平和記念館の開館(2008年)、4・3犠牲者発掘遺骨奉安館の開館(2011年)があり、両博物館にて遺骸発掘の展示に関する調査を実施した(写真1参照)。

濟州4・3研究所の紀要に寄稿した論文「アジア太平洋戦争と戦後処理の脱領域」が、ハングルで掲載されたことの意義も大きい。

今後、朝鮮戦争の戦死者や「強制連行犠牲者」の遺骨発掘などにも調査範囲を広げ、東アジア全域を視野に入れた比較研究を進めていく予定である。

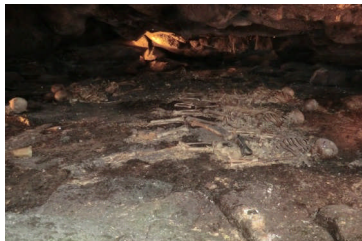


写真1: 4・3記念館の遺骨展示

## (2) 戦跡や虐殺跡地における観光・平和学習

沖縄では、戦後沖縄の観光業(バス会社、旅行会社、観光施設等)を担ってきた関係者への聞き取りを実施した。研究代表者のこれまでの研究では、バスガイドや平和ガイドに対する聞き取りが主であったため、戦後沖縄の観光を牽引してきた人びとへのインタビューから、新たな知見を得ることができた。

濟州島では、釜岳(カマオルム)に構築された旧日本軍の壕における地元の高校生を対象としたガイド(写真2参照)や、「4・3遺跡地」を巡る地元の小学生を対象としたガイドを参与観察し、観光や平和学習における死者や暴力の記憶の表象のあり方について検証した。

地元住民の強制労働により構築された釜岳の旧日本軍の陣地壕には、濟州戦争歴史平和博物館が併設されており、観光客や修学旅行生などが数多く訪れる。同じく強制的に動員された朝鮮人により掘削された松代大本

営や沖縄の地下壕と比較することで、アジア太平洋戦争末期の「本土防衛・本土決戦」体制を検証することができた。

本研究で得られた重要な知見は、戦跡の保存運動と観光ならびに平和学習との関わりである。沖縄、濟州島、松代において戦跡の保存運動が展開していく中で、その場所がどのように文化資源化、観光資源化されていったのか、フィールドワークや史資料から得られた具体的な事例をもとに検討した。

特に三つの地域で戦跡や史跡を案内するガイドの養成が懸案になっていることに注目し、濟州島の観光文化解説士や4・3文化解説士の養成講座、松代のガイド養成講座、沖縄の平和ガイド養成講座などについて、比較検討を行うことができた。



写真2: 釜岳の旧日本軍の壕の前で語るガイド

## (3) 死者の慰霊と死の記憶の表象

2011年と2012年の2度の濟州島調査の機会に、戦争や4・3事件に関する記念碑、刻銘碑、忠魂墓地、記念館を踏査したことが重要な成果として挙げられる。中でも、日本軍関連の遺構で戦後4・3事件の虐殺地となった城山日出峰(ソンサンイルチュルボン)、西卵峰(ソッアルオルム)、前述の別刀峯は、戦争、植民地、4・3事件、占領、虐殺、反共の記憶が錯綜する場所であり、重点的に調査を行った。

このような戦前・戦中・戦後の連続性を指し示す場所は、日本軍が敷設した飛行場や軍事拠点が米軍用地として転用されていた戦後の沖縄の状況と比較検討する中で、多くの知見を与えてくれた。

強制連行・強制労働の記憶を検証する上で、1995年に松代大本営地下壕跡に建立された朝鮮人犠牲者追悼平和祈念碑、1975年に沖縄県糸満市に建立された韓国人慰霊之塔、2006年に沖縄県読谷村に建立された「恨之碑」などとの比較が重要となった。それにより、大日本帝国が、東アジアの人びとを「労務者」「軍夫」「慰安婦」として強制的に動員することによって成立した「本土防衛・本土決戦」体制の問題を再検討することができた。

さらに、本研究では、戦争や虐殺の記憶をめぐるシャーマンの役割に注目し、沖縄や濟州島でシャーマンを担い手とした死者儀礼の調査を行った。濟州島においては、4・3事

件の死者を対象とした「クッ」と呼ばれる巫儀を参与観察することができたが、これは貴重な機会であった（写真 3 参照）。

加えて、悲嘆（グリーフ）という概念をキーワードとして、戦死者や「4・3 犠牲者」の存在が人びとの心を与えてきた影響（精神的後遺症）について考察した。このような問題意識のもとで、沖縄や済州島において、体験者（遺族）や精神保健関係者に聞き取りを実施し、関連文献を収集した。その研究成果の一部として、「戦争の心理的影響に対する医療人類学的アプローチ」、「戦争の記憶と感情の問題」、「沖縄戦の後遺症とトラウマ的記憶」などの論考が挙げられる。

その研究成果を、パネルセッション「沖縄戦の後遺症とトラウマ的記憶」（2012 年 3 月 30 日、於・早稲田大学）や招待講演「戦後沖縄の心象風景：沖縄戦の死者をめぐる記憶」（於・日本病院・地域精神医学会沖縄大会）、ならびに、沖縄の地元紙に寄稿した論説を通して広く世に問うことができたことの意義は大きいといえる。

以上の研究成果を踏まえて、三つの地域固有のミクロな社会・政治状況の中で捉えられがちであった戦争、植民地、占領、強制連行、戦後処理、反共などの記憶を、「本土防衛・本土決戦」という補助線を引くことで、東アジア地域が共有する経験としてマクロな視点から再編するための学問的試みの端緒を開くことができた。今後、さらに調査研究を積み重ね、東アジア地域という単位で戦争とそれに連なる暴力について想起する枠組みについて探究していきたい。



写真 3：済州島のシャーマンによるクッ

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

- ① 北村毅「アジア太平洋戦争と戦後処理の脱領域：沖縄出身者と朝鮮人の遺骨をめぐる」『4・3 と歴史』、No.12、印刷中（査読無）
- ② 北村毅「戦争の記憶と感情の問題：沖縄

の「戦後」と震災後が交差する場所から」『ワセダアジアレビュー』、No.13、pp.36-41、2013 年 2 月（査読無）

- ③ 北村毅「戦争の心理的影響に対する医療人類学的アプローチ：沖縄戦の記憶と精神障がい」『病院・地域精神医学』、No.187、pp.6-15、2012 年 7 月（査読有）
- ④ 北村毅「廢墟から民主主義を考える」『りいど みい』、第 3 号、pp.42-53、2012 年 4 月（査読無）
- ⑤ 北村毅「遺骨は誰に遺されているのか：沖縄戦の死の現場から」『世界』、No.808、pp.222-229、2010 年（査読無）

〔学会発表〕（計 3 件）

- ① 北村毅「沖縄戦の記憶と精神障がい」（パネルセッション「沖縄戦の後遺症とトラウマ的記憶」）、復帰 40 年沖縄国際シンポジウム、早稲田大学、2012 年 3 月 30 日
- ② 北村毅「戦跡を巡ること、戦争を語り継ぐこと」、「宗教と社会」学会研究プロジェクト第 5 回研究集会、鹿児島県立奄美図書館、2012 年 3 月 3 日（招待講演）
- ③ 北村毅「戦後沖縄の心象風景：沖縄戦の死者をめぐる記憶」、日本病院・地域精神医学会、沖縄コンベンションセンター、2011 年 11 月 18 日（招待講演）

〔図書〕（計 2 件）

- ① 北村毅「沖縄戦の後遺症とトラウマ的記憶」（福間良明他編著）『戦争社会学の構想：制度・体験・メディア』、勉誠出版、2013 年 6 月刊行予定
- ② 北村毅「「戦死」を掘る：沖縄における遺骨収集の現在的展開」（比嘉豊光・西谷修編著）『骨の戦世：65 年目の沖縄戦』、岩波書店、pp.55-62、2010 年

〔その他〕

- ① 北村毅「沖縄から震災後を考える(1)～(4)」『沖縄タイムス』、2013 年 3 月 11 日～14 日（朝刊）
- ② 北村毅「沖縄戦と心の傷(1)～(5)」『琉球新報』、2012 年 6 月 18 日～22 日（朝刊）
- ③ 北村毅「普天間・原発 重なる構図」『朝日新聞』、2012 年 3 月 13 日（夕刊）
- ④ 北村毅「私の沖縄戦『体験』」『沖縄タイムス』、2011 年 6 月 22 日（朝刊）

- ⑤ 北村毅「遺骨から『日本兵』を問う  
(上)(下)」『琉球新報』、2011年6月20  
日～21日(朝刊)
- ⑥ 北村毅「遺骨が語るもの」『沖縄タイムス』、  
2010年6月17日(朝刊)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北村 毅 (KITAMURA TSUYOSHI)  
早稲田大学・アジア研究機構・研究員  
研究者番号：00454116